

平成 22 年度 第 3 回礼文町生物多様性地域戦略策定検討委員会
(第 2 回札幌ミーティング) 議事概要

日 時 平成 23 年 2 月 17 日 (木) 10:00 ~ 12:45
場 所 環境省北海道地方環境事務所会議室 (札幌第一合同庁舎 3 階)
出席者 < 委員 >
宮本委員長代理、村上委員、河原委員、高橋委員、杉浦委員、愛甲委員、八巻委員、
佐藤委員、古谷委員
< オブザーバー >
坂本統括自然保護企画官 (環境省北海道地方環境事務所)
< 事務局 >
礼文町産業課、株式会社ライヴ環境計画

1 委嘱状の交付

- 今回より新たに佐藤謙教授 (北海学園大学工学部) が検討委員として参画。宮本委員長代理より、佐藤委員へ委嘱状の交付が行われた。

【自己紹介】

- 委員及びオブザーバー自己紹介。

2 議題

第 2 回検討委員会 (第 1 回札幌ミーティング) の内容確認

- 事務局より、第 2 回検討委員会 (第 1 回札幌ミーティング) の議事概要を既に送付していることから、内容についての質問の有無を確認。 < 質問なし >

ガイドライン (2011.02.17 版) について

- 事務局より、戦略策定は 2 カ年事業であることから、今年度はガイドラインの項目を挙げた段階まで進め、町長のメッセージ (今年度のまとめと来年度に受けて)、ガイドライン (内容の項目)、資料の 3 つが今年度の成果となることを説明。
- ガイドライン (2011.02.17 版) に反映することができなかった村上委員からの提案書の内容について説明・補足しながら議事を進行。

< 1-1 . 戦略策定の背景 >

- 意見・質問なし

< 1-2 . 戦略の位置づけ >

- 「生物多様性」、「いきものつながり」という用語を整理する。

(八巻委員)

- 50 年先の目標に向かって、10 年後、20 年後など、どのように進めていくのかを示すロードマップのようなものを作ることは想定しているか。

(事務局)

- 今の段階で、あらかじめそのような具体的な目標設定をするのは難しいと考えている。施策の中の「教育」などで抽象的ではあるが触れていきたいと考えている。

<2-1. 現状>

(高橋委員)

- 町史には自然に関する情報も含まれていると思われる。礼文町の町史を作る部署と連携すれば、効率よく情報の収集・整理ができるのではないかと。また、そういった連携したプロセスを経ることによって、生物多様性地域戦略(以下、「戦略」)の策定や「いきものつながり」に対する町内での認知や意識の向上にもつながるのではないかと。

(河原委員)

- 漁業・水産業に関する統計数値や観光入込客数などは、礼文島のいきものつながりに関わりが深いと考える。どのように関わっているかを明記しながら記載したほうがよい。
- 放棄農地にササが侵入している場所など、今後どのように扱っていくかの判断材料になるので、農地や林地面積の推移も把握しておいたほうがよい。

(高橋委員)

- 航空写真があれば土地利用等の変化を定量的に把握することができる。

(愛甲委員)

- 航空写真等から GIS(地理情報システム)等の数値化したデータを作るのは多くの時間・費用を要すると考えられるため、航空写真は情報として集めておき、土地被覆の変化の概要などを定性的に記述しておくとうい。

(佐藤委員)

- 海の多様性については扱わないのか。漁業の対象となっている生き物だけでなく、海の生き物と陸の生き物はつながっているので、言葉だけでも陸と海のつながりは触れておくべきではないかと。
- 北部のササ地は昔の山火事跡地である。林業や山火事など過去の出来事が現状につながっていることを把握しておくことが大切である。過去から現在に至る変化をふまえて今後のことを考えるべきである。

(愛甲委員)

- 礼文島の植生の変遷についての研究はされていないか。

(佐藤委員)

- 植生と植物相の両方についてそれらの変遷を示した論文はない。基礎・応用研究が十分でないことは今後の課題として挙げておく必要がある。

(八巻委員)

- 礼文島の人たちが自然とどのように関わり、影響を与えてきたか、定性的な記述で構わないので整理する必要がある。今の自然が礼文島に元々あった自然と捉えてしまう人もいる。

(宮本委員)

- 2-1-2の「礼文島の歴史」の中に山火事などの出来事を含めて行ってはどうか。

(佐藤委員)

- 森林が減少したことだけでなく、植林など森林を増やす取り組みが行われてきたことについても記述することが必要である。

(古谷委員)

- 礼文島でも薪のために集落ごとに木を伐り、伐った場所に植林をした。植林も昔から行われていることで、植林をしなかったところにササが侵入している。

(佐藤委員)

- 町史や高齢者への聞き取りなどから、礼文島の昔の暮らしといきものつながりの現状を対応させる必要がある。そのような情報が少なければ、情報収集も今後の課題となる。
- 生物多様性の第2の危機は、本州において人手を加えてきた里山の生物が人間の影響が少なくなったことによって絶滅・減少する例が生じたが、北海道ではそのような里山での絶滅・減少はほとんど認められないので、環境省の表現をそのまま使うことには気をつけなければならない。
- 里山ということではなく、自然に対する人の関わりの視点から、礼文ならではの事例があれば触れるといいのではないか。

(宮本委員)

- レブンアツモリソウの群生地はかつて畑として使われていたが、放棄されてササ刈りなどの手入れが行われなくなって群生地が衰退したと思われる例もある。

(坂本統括自然保護企画官：オブザーバー)

- 桃岩付近ではササ刈りで多様性が増しているようだ。人が関わって維持される自然があるということを明示すべき。

(佐藤委員)

- 雪解けの時期は植物の開花時期などに影響する。温暖化の影響に関連して、積雪深や雪解けの時期に関するデータも必要である。

(河原委員)

- 気象に関するデータは気象庁まとめている。春の乾燥化と5月の遅霜が植物へのプレッシャーになっている。短期間のデータでも温暖化の可能性が考えられる。

(古谷委員)

- 近年、5月の遅霜がみられる。花への影響が考えられるため、役場から傘を借り、霜を防ぐ活動もしている。

(愛甲委員)

- 礼文島の土地利用として保護区をどのように扱うか？保護の取組として保護区を明示しておくべきである。
- 礼文島の観光入込客数は減少傾向にある。旅行形態(個人/団体)の方がいきものつながりに関わりが強いと考えられるため、観光入込客数と併せて旅行形態の現状・変化を把握しておく必要がある。

(宮本委員)

- レブンアツモリソウの生育場所と観光客の入込みをリンクさせた情報も入れたほうがよい。

(高橋委員)

- この検討委員会の中で、礼文島に関する情報収集を一元化し、各委員が共有できるような仕組みがあるといい。その情報を元に話しあいを深めていってはどうか。

<2-2.課題>

(八巻委員)

- 住民が知らないところで計画が出来上がることは避けたほうがよい。検討段階で情報提供や参加の機会を設ける必要があると思う。できれば説明会など、町民から直接質問を受ける場があるとよい。他にもニュースレターを配布するのはどうか。

(宮本委員)

- 今年度、いきものつながりプロジェクトにもふれたパンフレットが作成されている。このパンフレットは町民に配布される予定である。

(佐藤委員)

- 生物多様性という言葉は、なじみのない人にとっては理解しづらい。計画の策定の前に、「いきものつながり(生物多様性)」について知ってもらうことが大切である。
- 作成されているパンフレットはとてもわかりやすく、「いきものつながり」という言葉もよい。「いきものつながり」=「生物多様性」と認識できるよう、どこかに「生物多様性」という言葉をカッコ書きでつけておいてはどうか。町で進める生物多様性地域戦略の策定とつながっていくと思う。

(愛甲委員)

- 本戦略策定をテーマに住民と直接対話することも考えられるが、他地域の事例などから自分の住む地域の生物多様性(いきものつながり)に目を向けることもできると思う。

(河原委員)

- 町民が興味を持つような礼文島ならではのいきものつながりの話題があるのではないか。

(宮本委員)

- 町民は観光客とは違い自然への興味・関心が薄く、何に配慮すべきか知らないことが多い。作成中のパンフレットを町民に配布し、町が観光客に対してお願いしていることを伝えることによって、いきものつながりに対する町民の関心を引きつけることにつながると思う。

(佐藤委員)

- 50年先に目標を達成するのではなく、今の理想を掲げる必要があると思う。そして、5年ごとに施策がその理想に向かっているかチェックすればよい。

(坂本統括自然保護企画官：オブザーバー)

- 「礼文島の自然はこうあってほしい」ということを描く。実現可能性を考えては、理想とする形を描くのは難しい。

(佐藤委員)

- 常に変化している自然に対して、科学的調査によって現状把握をしていくことが必要であり、課題として捉えるべきである。
- 調査を進めるにあたり、環境省や林野庁などとの連携が必要となる。生物多様性保全において、国・北海道・礼文町の横のつながりを作る必要がある。

(坂本統括自然保護企画官：オブザーバー)

- 礼文町の戦略策定では、環境省はオブザーバーとして参加している。まず町の考えとして戦略をまとめ、戦略に基づく町からの要請により各関係機関も連携・協力するという形を作っていくことが望ましい。

(高橋委員)

- この戦略策定をもって礼文町町内？においても他部署との連携を作れるとよい。

(佐藤委員)

- 北海道の生物多様性保全計画では道庁内で連携を図る会議、他部署と連携する体制を作った。道の計画の中で良いところだと考えている。礼文町でもこのような連携の形を作れるとよい。

<3-1. 基本的考え方>

(佐藤委員)

- 「植物を中心に」と書いてあるが、生物多様性保全の考え方は、全ての生き物に価値(恵み)があり、今、どのような恵みがあるか分からなくても、今後恵みを受ける可能性があると考えている。この考え方が全ての生き物を守る必要があることにつながっているので、植物に限定せず、礼文島を構成する生物全てを対象とすべきである。

(河原委員)

- 礼文島では、植物からみるといきものつながりがイメージしやすいだろうということで「植物を中心に」という記述になったと認識していた。
- 実際には、植物に関する記述が多くなると考えられるが、植物だけでなく礼文島の生態系全体を意識した内容になると考える。

<3-2. 目標>

(愛甲委員)

- グランドデザインとして地図を描くことは、生物多様性(いきものつながり)の現状を把握していなければ難しいと考える。

(河原委員)

- 礼文島ではどんな姿が目標として考えられるのか、まずそれが形づくられないと議論を深めていくことは難しい。例えば、人の居住区域と自然をはっきり区分するのか、それとも移行帯を設けるのか、など。

(坂本統括自然保護企画官：オブザーバー)

- 望ましい自然の姿とともに、どのように町民が恵みを利用していくことか、という視点も併せて記述できるとよいのではないか。
- 町民に最も関係するのは今後の礼文島の産業の発展である。持続可能な漁業を目指すということは、すでに理解されていることと思う。

(佐藤委員)

- 漁業に関する法令でも生物多様性の保全と持続可能な資源の利用が明記されている。具体的なアクションプランの中で触れるのは難しいかもしれないが、目標の中に海の生物多様性は入れておく必要がある。

<4. 基本方針>

(佐藤委員)

- 常に生物多様性の現状を把握し続けることを位置づけるべきである。

(愛甲委員)

- 「基盤情報の整理・充実」の「基盤情報」という言葉では、生物多様性(いきものつながり)についての基礎データ、とはイメージしにくいだろう。

(佐藤委員)

- いきものつながりの情報収集・整理・蓄積としてはどうか。

<5. 施策(アクションプラン)>

(坂本統括自然保護企画官:オブザーバー)

- アクションプランには、新たに取り組むことよりも既存の取り組みを中心に整理した方がよい。新たな取り組みは予算や体制など実施が難しいことが予想されるためである。

(八巻委員)

- 現在取り組んでいなくても、将来取り組む必要があることは整理しておくべきではないか。

<6. 戦略推進>

(佐藤委員)

- 生物多様性を守るため町内の各部署やその他の関連機関で構成される組織(協議会等)を仮の名称でもよいので推進体制に含めておいてはどうか。

(杉浦委員)

- 主体それぞれの役割として区分して書いてしまうと、それぞれの主体の連携が見えづらくなるか。

(佐藤委員)

- それぞれの連携が見えるように組織図のような図に示すのはどうか。

(杉浦委員)

- この戦略推進の核となる組織が位置づけられるとよいと思う。

(愛甲委員)

- 戦略全体の推進体制とともに、各施策の実施主体を明確にすることも大切である。

(杉浦委員)

- ひとりひとりが自分の役割に意識を持つことができる表現がよい。

(佐藤委員)

- 戦略の中で、礼文島や町民が受けている恵みを具体的に書いていくことによって、それぞれに関わる役割が浮き彫りになるように思う。

その他

- 事務局より作成中の普及啓発資料を提示・説明。
- 第4回検討委員会は、2月28日(月)9:00より礼文島町役場3F大会議室にて開催。

3 委員長挨拶

- 宮本委員長代理より閉会の挨拶。

以上